Osaka University Knowledge Archive

Title	修辞学的逆説の一分析 : アイロニーとの関連から
Author(s)	光原, 百合
Citation	Osaka Literary Review. 1990, 29, p. 76-88
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25482
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

修辞学的逆説[1]の一分析
——アイロニーとの関連から

光　原　百　合

1. 序

（1） 彼は逆説を弄してばかりいる。

（2） 『人目をひくために頭立ちしている真理』というのがパラドックスの定義とされている。（チェスタトン『ポンド氏の逆説』p. 66）

（3） 車とはそもそも目的地まで速く移動するためのものだ。しかし日本では車の数が増えすぎたため渋滞が起こり，時期によっては目的地に着くまで途方もない時間がかかるという｛逆説的な／皮肉な｝状況がある。

修辞技法としての逆説は，なかなか捕えにくいものである。たとえば（1）の文のように用いられた場合，逆説はどこか浅薄な，信用ならない表現といった印象を与える。（2）の文であげられたチェスタトンなどは，同時代人からしばしばそういった批判を受けている。ところがチェスタトン本人は彼一流の警句を用いながらではあるが（2）に見られるように，逆説とは真実を述べるための表現であると言う。一つの表現が，なぜ一見相反する意味を持つのだろうか。

もう一つ逆説に関して興味深い現象がある。いわゆるアイロニーとの類似である。（3）の例に見られるように，一つの状況が「逆説的」とも「皮肉（＝アイロニー）[2]な」とも表現できる場合がある。これはこの二つの表現に共通する部分があるということではないだろうか。ただしこう述べても，「逆説」と「アイロニー」が全く同じ意味内容を持つと言っているわけではない。（3）でも「逆説的」といった場合と「皮肉な」と言った場合で

は，微妙なニュアンスの違いが見出せる。ただこの二つの表現が，同じ状況を指すのに使われる以上，基本の構造に共通したものがあると考えられるのだ。

逆説とアイロニーとの間に関連を見出した前例はなくはない。たとえば新英語学辞典（1987：p. 823）には，「…真の賢者を愚者と見たてたところに Erasmus の逆説的な洞察があった。Erasmus のこの英知はソクラテス的アイロニーに通じるものであり，パラドックスもアイロニーも，共に，世界あるいは実存そのものを矛盾・対立・多元性の相において認識する知性の所産である」と述べられている。しかしこの説明は，辞典という性格上抽象的なレベルのものであり，具体的に逆説とアイロニーがどういった構造を共有するがゆえに通じるものがあるかは，まだ未開拓の分野ではあるまいか。

整理すれば，この私論で扱うテーマはこういうことになる。一見相反する意味を持ちうる逆説とはどういう構造を持っているのか，そしてその構造はアイロニーとどう共通し，どう異っているかということである。それでは順次論じていきたい。

2. 一般的な逆説の概念

逆説に関してはまだあまり言語学的に系統立った研究は行われていないように思われる。したがってここでは一般的な逆説に関する考え方を確認してみよう。

前述のチェスタトンの「頭立ちした真実」という定義はユニークで直感的にわかりやすいが，「頭立ち」の意味がはっきりしない。たとえば，

（4） a．彼は財産をたくさん持っているから豊かである。
　　 b．彼は財産をたくさん持っているから貧しい。

このような場合，(4a) は一般的な意味での事実であり，(4b) はそれを「頭立ち」させた逆説表現といえるが，(4b) は決してもとの (4a) の内容に人

目をひくため，つまり強調するために「頭立ち」させてあるわけではない。したがって「人目をひくために頭立ち」という定義は誤解を受けやすく，不十分である。

またフィリップ・ホイールライト（1959：p. 98）は次のように述べている。

「…通常のパラドクス，あるいは表面のパラドクスは，単に言葉の手品であり，それによって要点がいっそう機知に富み，効果的なものとなりうる。(中略)こうしたパラドクスは，夜会の会話に趣をそえ，当人には才人の評判をもたらすとしても，実際には一語のふたつの内容を多少故意に混乱させることにその効果が依存している。」

ホイールライトの意見は修辞学的な逆説の価値について，かなり低く見たものである。確かに，「一語のふたつの内包を混乱させる」という見方は(4b)に関しては当たっている。つまり財産を持っているという物質的な豊かさと，精神的な豊かさという表現を，わざとどちらとも言わずに投げ出すことによって意外性を狙ったものである。

しかしながら，この表現を，「夜会の会話に趣をそえ」る単なる「言葉の手品」としてしまっていいのだろうか。逆説を聞いたときに多くの人は，単なる言葉遊びではなく，何がしかの強い感銘を与えるものと受けとる場合が多い。もちろん中には，言葉の使われ方だけに気をとられてジョークのようにしゃれた表現だとしか思わない人もいるが，それはあくまで受け手の問題であり，逆説の価値をおとしめるものではない。

さらに，語を曖昧に用いることとはまったく関係ない逆説もある。前出の（3）がいい例であろう。「目的地まで速く着くために車に乗るのに，かえって遅くなってしまう」という逆説表現には，(4b) の「豊かさ」のように曖昧に用いられた語は一切見られない。

もう一つ指摘するなら，その (4b) に関連して次のような例を見てみよう。

(4) b′ 財産をたくさん持っているからこそ精神的に貧しいという逆説的な状況は世間に珍しくない。

この例においては「精神的な貧しさ」として語の曖昧さを排除してあるにもかかわらず，意表を突く効果が薄れているだけで，その状況を「逆説的」と呼ぶことにいささかも不自然さはない。

したがって「語の用法の曖昧さ」は，逆説を強調する効果はあるにしろ，逆説の本質ではないと思われ，この定義も不十分だということになる。

佐藤信夫 (1983) は，論理学的逆説と修辞学的逆説について，その違いを成立過程から簡潔に説明し，この二つがA＝～Aの構造を共有するものとして一般化した上で，次のように述べている。(p. 45)

「論理学や数学は語のかわりに符号を用いることによって「意味」を定着あるいは空虚化することに成功した。(中略)数理的思考は，意味を純化することによってみずからを純化した。不純なまま残されたもの――すなわち人間的な切実な問題の大部分――は，あいかわらず言語の手にゆだねられている。」

すなわち，論理学的な意味で逆説を論じるときには，本来成立しえないA＝～Aを導きだすものは何かを記号化することで突きとめようとする。一方修辞学的な逆説では，矛盾を許さない記号と違って，「語の意味が弾力をもつ」(佐藤) ため，一見相反すると見える命題どうしが両立する，という。

本論は修辞学的逆説を分析しようとするものなので，佐藤の区別は非常に参考になるが，(3)に見られるようなニュアンスの混乱のない逆説が，なぜ逆説としての効果を持つかがやはり説明しきれないのは，ホイールライトの説に関する問題点と同様である。

こういった様々な側面を持つ逆説をすっきり説明することは可能だろうか。それを次の節で探っていきたい。

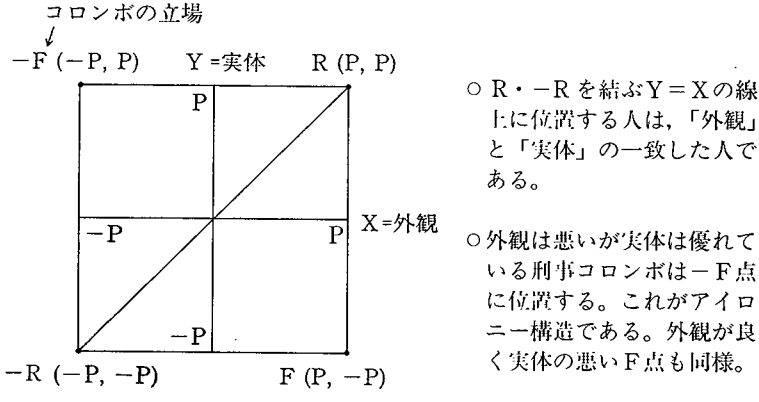
3. アイロニーと逆説

アイロニーと逆説の共通性を考えるには，従来のアイロニー論ではおさまりきらない部分が多い。その点，河上（1984，1986，1988）の論ずる認識構造から見たアイロニー分析が非常に参考になるため，この私論でも彼の論を土台に逆説を分析していきたい。詳細は彼の論を参照していただきたいが，便宜上ここでも簡単に述べておく。

河上のアイロニー論は，従来の言語表現内だけにおいてアイロニーを分析しようとする方法と違い，その根底に外観と実体のズレ，先行認識と現実認識のズレといった「反対関係的な『偽』の構造」（河上）が存在すると考える，認知的な立場から分析し，それを四極構造を用いて表現している。

たとえば河上はアイロニーの典型的な存在として刑事コロンボ[3]をあげ，次のように説明する。（図１）

（図１）



外観を横軸に，実体を縦軸にとった場合，刑事コロンボは風采があがらない，つまり外観は望ましくない（−P）が実体は非常に優れた（＋P）刑事である。図１においてコロンボは−F点に位置するが，逆に外観は優れているが実力はまったく伴わないような存在はF点に位置する。河上によるとこういう外観と実体のズレを持った反対関係的な「偽」の認識構造がア

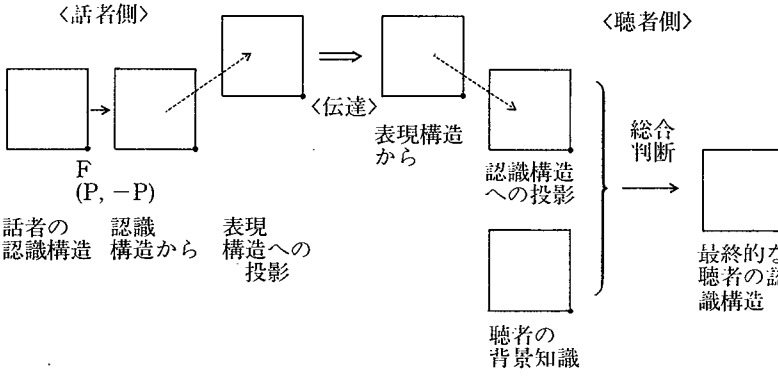
イロニーの構造と呼ばれる。

刑事コロンボの例は，ある状況・存在自体が「アイロニー」と呼ばれるわけだが，それが発話されるときは，話者・聴者双方の言語・認識構造が図示されるので，もう少し複雑な図となる。もちろん基本が，「ズレを伴った反対関係的な構造」にあることに変化はない。たとえば，

（5）　（自分を裏切った友人のことを）
「奴はまったくいい友人だぜ」

というような場合で，これは次のように図示される。（図２）[4]

（図２）　発話によるアイロニーの伝達



それぞれの正方形は図１を簡略化した構造図である。話者は聴者に，ある友人が外観は良かった (+P) が実体は悪かった (−P) ことを伝えようとしている。「偽」の構造であるＦ点が伝達され，右端の最終的な聴者の判断となる。ただし，ここでは聴者の背景知識にもＦを置き，聴者が事情を知っているという設定にしたが，聴者がその間の事情を全く知らず，白紙の構造しかとれない場合もあるし，聴者はまだその友人を信じていて，R (P, P) の認識構造をとっている場合もある。

それでは以上の彼の論を参考に，いよいよ本論の中心課題，アイロニーと逆説との共通点と相違点について私論を展開していこう。

奇しくも逆説に関して次のような表現がある。

（6） …探偵役にカトリックの平凡きわまる神父をらっし来ったことがチェスタトンの逆説であった。(『ブラウン神父の知恵』p.354, 中村保男による解説より)

推理小説に見られる探偵像には様々なものがある。チェスタトンは自分が書いた推理小説の探偵役にブラウン神父という人物を創り出したが，この人物は，外観はこっけいなほどみすぼらしく，そして実体は優れた人物であるという，刑事コロンボと同一のタイプに属する探偵なのだ。こういった探偵を前述のように「アイロニー」とも，（6）のように「逆説」とも形容できるということは，この二つの表現技法が，図1のような外観と実体とのズレ，つまり反対関係の構造を共有しているからではないだろうか。

アイロニーと逆説を分析する上においてこの四極構造が効果的なのは，この両者が多元的な構造を持つからである。単純な矛盾であれば，Aと～Aの対立という直線的・一元的な構造で把握できる。そして論理学的な逆説の研究は，様々に錯綜した要素をAと～Aの対立図に還元しようとする試みだと言えるように思う。

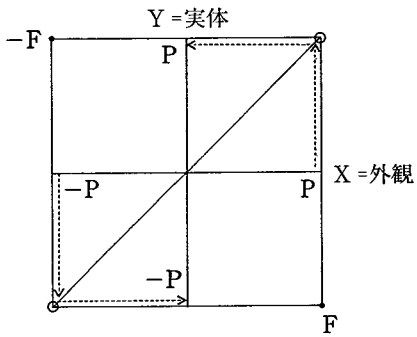
一方，アイロニーや修辞学的逆説では，「外観」と「実体」のように一元的には論じられないレベルのことを分析に組み込まなければならない。それを四極構造の平面図で表現すれば極めてわかりやすい図になるのである。

刑事コロンボやブラウン神父の分析は「外観」と「実体」を軸にとったが，河上（1988）はこれを「先行認識」と「現実認識」として一般化している。そうすると例文（3）の逆説・アイロニー表現は，先行認識の一種である「意図」と現実認識の一種である「結果」が対立するという構造を持つことになる。「速く目的地まで」というプラスの「意図」が「遅く着く」というマイナスの「結果」をもたらし，図1のF点という反対関係の認識をもたらすのだ。このような例の有名なものが，いわゆる「運命の皮肉」「ドラマチック・アイロニー」そして「歴史の逆説」といった定着した表現としてしばしば用いられるのである。

こうしてアイロニーと逆説は，どちらも四極構造のＦ点あるいは－Ｆ点で表現される認識構造を共有することがわかる。しかしながら先にも述べたように，だからといってこの二つがまったく同じニュアンスを持つわけではなく，それが肝心な点である。刑事コロンボやブラウン神父の例で考えてみよう。

ここで指摘しておきたいのは，多くの人間が「外観」と「実体」は一致するはず，という，よく考えてみればそれほど根拠のない「常識」あるいは偏見を抱いていることだ。四極構造の図でいえば，外観を初めて見たとき，Ｙ＝Ｘの線にひきずられて，外観が良ければ実体も良いと判断してしまうのだ。（図３）この「常識」があるからこそ，それに違反したアイロニーや逆説が有効なのである。

（図３）



一般に人々は，「外観と実体は一致する（Ｙ＝Ｘ上に分布する）」と信じているため，外観がよければ実体もよい，外観が悪ければ実体も悪いと判断してしまう。それゆえにＦや－Ｆ点の存在が意表を突くのである。

さて，たとえば外観のさえない探偵を見た犯人は，常識にとらわれて探偵を甘く見る。ところがその手腕を見せつけられたとき，真の実体が外観とは逆の構造になっていたことに気づく。こういったときの犯人の心境は，おそらく痛烈な「アイロニーを感じる」のであり，「逆説的だと感じる」とは表現しにくい。

こういった探偵像を見て，「逆説的」と感じるのは，たとえば読者である。さえない名探偵が見事に謎を解くのを見て，読者や視聴者は胸のすく

思いを覚え，ふと，「外観」と「実体」が一致すると錯覚しがちな自分たちの通念を反省する。(その点，刑事コロンボでは犯人側が常に上流階級の，プラスの外観とマイナスの実体を持った，図1で言えばF点に位置する者であることも興味深い。逆説の意図が二重にこめられているのだ。)

このように，反対関係の「偽」の構造を根底に持つ一つの状況は，場合によっては「アイロニー」とも「逆説」とも表現できるが，ある状況からアイロニーを感じるのは，どちらかといえばそのズレの構造から直接の被害を受ける者であり，一方その状況を「逆説的」であると感じるのは，そこからある程度客観的な立場を保てる者である場合が多いようである。これはなぜだろうか。

私はこれが，逆説とアイロニーの目指す効果の違いからくると考える。すなわち「アイロニー」は反対関係の構造そのものを強調するための表現であり，あえて現実と逆の発話を行うことによって，現実の思いがけなさを強調する。しかし逆説とはより抽象的に，ズレの構造を認識させることによって我々が日ごろどれほど「常識」に盲従しているか（図1でいえば，Y＝Xの線に基いて他人を判断するような）を悟らせ，常識そのものの見直しを迫るためのものだと思われる。したがって直接の利害からワンクッション置いた客観性が生まれる。

「急がば回れ」など，ことわざにはしばしば逆説的と形容されるものがあるが，ことわざを「アイロニー」と形容することはあまりない。しかし，たとえば急いで失敗ばかりしている人にこのことわざを言うなど，場面の文脈が決定されれば「アイロニー」となりうる。こういった“逆説の普遍性”と“アイロニーの個別性”も，やはり直接の効果を狙うアイロニーとワンクッション置いた逆説との違いから派生するものなのだ。

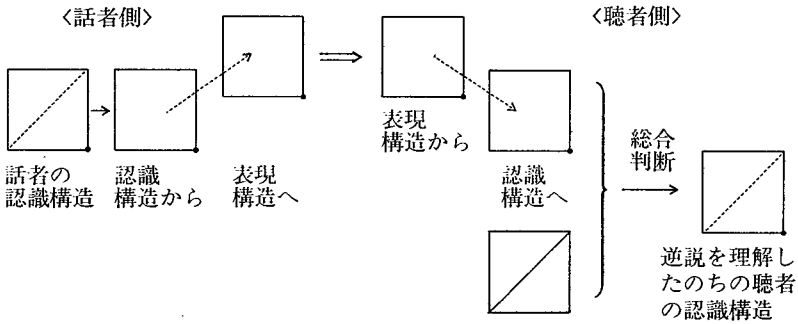
アイロニー（皮肉）にしばしば，「いやみ」「意地悪」などのニュアンスが加わり，逆説にはそんなことがないのも，この二つの主観性対客観性，ひいては情緒的対理性的といった性質の違いからくるのではないだろうか。

それでは次に，（5）のアイロニーのように話者・聴者双方の認識を図示

して逆説を表現してみよう。

（7）　（話者が聴者に向かって）
「彼は財産をたくさん持っているから貧しいんだ」

（図4）　逆説の発話
「財産を持っているから貧しい」



すなわち多くの聴者は，四極構造上の存在はY＝Xの線上に分布する，つまり物質的に豊かなら精神的にも豊かであろうという「常識」を無意識に信じている。だが逆説の発話者はそういった偏見を打ち壊すため，あえてY＝Xの線上から最も遠いF点を言語化するわけである。このあたりも，反対関係的な偽の構造を共有するという点ではアイロニーと似ているが，逆説の発話の目的はかなり異なっているといえよう。

ここで指摘しておきたいのは，逆説は「常識に惑わされて見逃されがちな真実」ではあっても「普遍の真理」とは限らない，ということだ。外観も実体もともにさえない人物も存在するだろうし，財産も多いが心も豊かな人物も，決していないとは言えない。逆説を発する者の第一の目的はやはり，それは十分承知の上で，常識に捕われた人々の物差しを相対化し，

固定してしまった思考の枠組みから解放することだと思われる。

4. 既論との検証

以上のように見てきた逆説論が，小論の初めに見た逆説の数々のポイントと矛盾しないかどうか検証してみよう。

逆説を成立させる条件は，アイロニーと同じくプラスとマイナスのズレ，反対関係の偽の構造である。チェスタトンのいう「頭立ち」とはこの部分を直感的に表現したものだろう。

プラスとマイナスの矛盾を一元的に還元できるものは論理学的な逆説であり，多元的にしか表示できないものが修辞学的な逆説である。この場合の多元性には，語の意味を曖昧に使うことから生まれるものもあるが，「外観」と「実体」，「意図」と「結果」などの対立も含まれる。したがってこう考えれば，ホイールライトや佐藤の説も，また語の曖昧性を含まないブラウン神父のような存在の逆説も，（3）のような「運命の逆説」も包含できることになる。また（4b′）のように（4b）から曖昧さを排除したものも，反対関係の認識構造を保持する以上，逆説と呼べることも納得がゆく。ただし「物質的な豊かさに対する警鐘」という話者の意図がわかりやすくなる半面，聴者の側にも心の準備ができるため，(4b)の持つ，常識に鋭く疑問を突きつける効果が薄れるのはやむを得ない。

「逆説を弄する」という非難がありがちなのは，もちろんあらゆる修辞法は使いすぎればいきいきした効果を減ずるものであるが，特に逆説は，常識にとらわれた我々の思考の枠組みを破壊し，新しいものの見方をつきつける。受ける側にも能動的な役割が必要となるし，信じていたものがぐらつく不安も覚えさせる。それだけに一層いらだたしさを感じるのではないだろうか。

以上のようにアイロニーと逆説の共通点を，四極構造を通じて根底に同じ構造を持つものとして立証し，それらの表現が実際に使用される場合に見られるニュアンスの相異は何に由来するものかを検討してきた。

今回は比較的基本的な逆説を，構造解説を中心に分析してきたが，この表現技法が，たとえば実際の文学作品の中でどのような役割を演じているかなど，もっと実例に即した批評が可能かどうかも考えてみたいと思っている。今後の研究課題としたい。

注

1）Paradox の訳語として本論では「逆説」を用いたが，引用例中には原文のまま「パラド（ッ）クス」と表記してある部分もある。両者の間にニュアンスや用法の変化はないと判断した。

逆説には大別して，「急がば回れ」「富める者は貧しく貧しき者は富むであろう」に代表されるような修辞的効果を狙う逆説と，「私はウソをついている」のような論理上の矛盾に基づく逆説とがある。本論では両者の違いも多少扱うが，中心テーマは前者がどういった効果を持つかであり，したがって特に断わりのない場合，「逆説」とは修辞学的逆説を意味する。

2）「アイロニー」の訳語として「皮肉」ではカバーしきれない部分もある（詳細は河上（1988）参照）ため，原則としてアイロニーという用語をそのまま使っているが，この例のようにニュアンスが重なる場合は，日本語として自然な「皮肉な」を採用した。

3）アイロニー像の典型としての刑事コロンボの例は，1989年度講義及び私的な会話の際に河上先生から直接ご教授いただいた。図１も，講義の際のハンドアウトに本論のテーマに応用できるよう筆者が補足を加えたものである。ここに感謝の意を表します。

4）河上（1988）の図10を補足したもの。非常に奥の深い重要な図であり，紙数の都合でこれ以上触れられないのが残念だが，本論文の展開としては，話者から聴者へ反対関係的な偽の構造が伝わったことが確認できれば十分である。

[参考文献]

エンプソン，ウィリアム（岩崎宗治訳）（1974）『曖昧の七つの型』研究社。
ヒューズ・ブレヒト共著（柳瀬尚紀訳）（1979）『パラドクスの匣』，朝日出版社。
河上誓作（1984）「文の意味に関する基礎的研究」『大阪大学文学部紀要』第24巻，大阪大学刊。
———(1986)「認識の投影としての言語——トロープとアイロニーの場合——」『英語青年』第132巻，第１号，（４月号）。
———(1988)「偽善型，偽悪型アイロニーと世辞，謙遜表現」『日本語・日本文化

研究論集第4輯』，大阪大学文学部共同研究，大阪大学刊。
大塚高信・中島文雄監修（1987）『新英語学辞典』，研究社。
佐藤信夫（1983）「逆説という修辞現象」中村明編『日本語のレトリック』，筑摩書房。
ヴァインリヒ，ハラルト（井口省吾訳注）（1973）『うその言語学』，大修館書房。
Wheelwright, P., (1959) *Heraclitus*, Princeton. ただし本論では前掲の『パラドクスの匣』より孫引き。

［引用文献］

チェスタトン，G. K.,（中村保男訳）『ポンド氏の逆説』，創元推理文庫。
———，（中村保男訳）『ブラウン神父の知恵』，訳者によるあとがき。創元推理文庫。